

かつては日本一！日照率を生かした香川の塩づくり

～1961年頃の坂出付近～



【ねらい】 エネルギーをあまり使わず、自然を生かしていた身近な香川での昔の住まいや生活を振り返ることにより、昔の人々の様々な智恵や工夫を学ぶとともに、それらを現代の私たちの住まいや生活に生かし、限りあるエネルギーをいかに効率よく使っていくかを考えさせます。

かつては日本一！日照率を生かした香川の塩づくり
～1961年頃の坂出付近～



※資料64（塩田跡地にソーラーパネル）と関連付けて使用することで、日照率の高さを生かした昔の塩田が現代のメガソーラー発電所に活用されていることに気づくことができます。

【流下式塩田の枝条架（しじょうか）】
竹の枝を逆さに吊り下げた棚の上から海水を流して水分を蒸発させる。
入浜式塩田のように砂を運ぶこともなく、海水を自然に流下させるだけなので、労働力は大幅に軽減。

【入浜式塩田のおろし鍬作業】
塩分をとった後の砂を浜全体に撒く作業で、塩づくりの中での一番の重労働。

【資料解説】 この地図は、坂出市付近の昭和36年(1961年)4月当時のもの(地図発行：日本たばこ産業(株) 高松塩業センター)で、赤く塗られているところが塩田になります。

●日照率を生かした昔の塩田
昔から日照率が高かった香川県では、かつて坂出を中心に、広大な塩田が開発され、現在メガソーラー発電所（坂出ソーラーウェイ（平成24年11月から稼働））となっていて、ところも、当時は、塩田（総社浜塩田）が広がっていました。

●太陽熱を利用した塩づくり作業
【入浜式塩田】
右下の2枚の写真のうち、入浜式塩田は、江戸時代から昭和30年代頃まで行われていた塩づくりの方法です。潮の干満差を利用して海水を塩田に引き入れ、太陽熱と風を利用して水分を蒸発させ、塩分が付着した砂を集めて海水で洗い、濃い塩水を作ります。
朝4時頃から始まる一日の作業で、休憩をはさみながら日暮れまで続く相当な重労働だったと言われています。

【流下式塩田】
流下式塩田は、昭和20年代後半から昭和46年まで行われていた塩づくりの方法です。ゆるやかに傾斜した粘土地盤に海水を流し、竹の小枝などを組み合わせた「枝条架（しじょうか）」という装置にかけることにより太陽熱と風の力を利用して濃い塩水を作ります。入浜式塩田よりも効率よく濃い塩水を作ることができます。

●大変盛んだった香川県での塩づくりの変遷
香川県での塩づくりは、入浜式塩田を中心に大変盛んで全国の塩の3分の1を生産するほどになり、昭和30年代になると、労力10分の1、生産量2倍という流下式塩田が導入されます。しかし、その後わずか15年で、イオン交換膜と電力を利用してかん水をとる現代の方法が開発されると、天候に左右され、多くの労力や広い面積を必要とする塩田は不要となり、広大な塩田は、次第に工業用地や住宅地に姿を変えていったようです。

●塩づくりから電気づくりへ
日照率が高い香川県の特徴を生かし、太陽の恵みを、かつては、私たちの生活に欠かせない塩づくり（塩田）に生かしていた昔の人々の知恵や工夫、さらには塩づくり作業の苦労を写真から知るとともに、それを受け継いで、同じ土地を、今度は、同じく私たちの生活に欠かせない電気づくり（発電）にと、時代にあった形で地域を活用しようとする人々の未来に向けたまちづくりへの思いも併せて知ることができます。

資料提供：坂出市塩業資料館

【関連する各教科の学習内容】

	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
社会	○県の地形や産業、県内の特色ある地域				【地理】 ○日本の諸地域（産業） （環境問題・環境保全）		【公民】 ○私たちと国際社会の諸課題 （よりよい社会を目指して）
理科	○光の性質						
技術・家庭(技術)					B エネルギー変換に関する技術 ○エネルギー変換機器の仕組みと保守点検について		
家庭					○住生活の工夫		
技術・家庭(家庭)					○環境に配慮した生活の工夫 ○家庭生活と環境		